

母の魂魄！ 二人の子を救う

山口県 上原 一 司

はじめに

朝鮮咸鏡北道清津府での悲惨な終戦、六十年目の母の命日である八月十九日を、今年も迎えた。当時、清津府浦項国民学校六年生だった私も満七十二歳となった。

父、上原市作は明治二十七（一八九四）年に山口県萩町（現在の萩市）の長州藩士族の家に生まれたが、祖父の事業失敗から十四歳で下関に奉公に出て働き、大正になって朝日石油㈱に就職した。母のトミ子は、島根県の農家の長女として明治四十年に生まれ、十二歳のときに下関の大田家の養女となり、昭和二（一九二七）年に父と結婚したが、父母共に勤勉で努力家で、苦勞して貸家二軒を持つようになった。

昭和十七年八月、当時昭和商会に出向していた

に行けるぞ」という説明を受けたが、この言葉が昭和二十年八月十九日に私の命を救い、さらに妹の展子を発見救出する根源となった。

戦局もだんだんと厳しくなり、学校でも男の先生は次々と召集されて女の先生が主体となり、授業も手旗信号訓練とか、学校の防空壕掘り、さらには松根油の原料となる松根掘りなどに代わってきた。昭和二十年になると日本軍の動きが激しくなり、清津港に近い学校は待機宿舎となり、授業はできなくなった。そのうちにB―29爆撃機が清津上空を通るようになり、さらに港内に機雷を投下し、それが間違つて市内に落とされることもあり、不安が広がってきた。

八月九日、とうとうソ連軍が満州・朝鮮に一斉に侵攻して、清津市内も騒然となり学校の夏休みも打ち切られた。近くの鉄道官舎の人たちも南下を始め、騒々しくなってきた。十日に学校に行くやと登校した生徒は少数で、学校でも南に避難するように指導していた。いろいろなデマが飛び交つ

父は、清津府の朝鮮水産化工㈱に転勤の内示を受けたが、母はあまり気乗りせずだったが、命令でもあり俸給も四倍になるということから、子供の教育のことを考えてやつと決心し、渡鮮することになった。

一 清津での生活

家族五人（父母、姉、私、妹）は、浦項洞靜山上町に赴任した。昭和十七年ごろになると下関市内でも食糧不足となり、自由に買える物といえは、海草パンと屑うどんぐらいで、それも行列をして買っていた。だが清津では下関では見たこともない牛、豚、鶏などの肉類が店頭で吊されていた。日常生活でも父の新しい仕事の水産関係なので、海釣りに行ったり近くの温泉場に泊りがけで行ったりして、平和で楽しいことばかりだった。

学校の行事で輪城駅付近の山登りをしたとき、先生から近くの山に立っている鉄塔について「あの送電線は鴨緑江の発電所から京城（ソウル）方面に電気を送っている。あれに沿って行けば京城

でいて極度な不安に陥り、夜は近所の防空壕に避難していた。

二 両親の永久の別れ

我が家でも急いで荷造りをして南下の準備を始めたが、避難するのに一番必要な現金の手持ちがなく、父は銀行と郵便局に行ったが既に両方とも閉鎖していて、羅南に行けばまだ営業していると聞き、姉の千津代を連れて十三日の朝十時ごろに家を出たが、これが父と母との永久の別れとなるうとは夢想だにしなかった。

その日の昼過ぎに、連続して大きな爆発音が聞こえたので清津港の方を見ると、沖合いに見たこともない船から砲声と閃光がして、海岸付近の建物に火柱と黒煙が上がるのが見られ、何とも形容できない恐怖心を掻き立てられた。母は顔面蒼白となつて「あの船はソ連の軍艦だ！」とどなったが、そのすぐ後に多数の上陸用舟艇が海岸に向かってきた。父と姉が二時間前に羅南に行ったばかりで、母も事態の判断に混乱していたようだった。

近所の家族を誘って、三家族八人で炎上している市内を抜けて山の中に入った。なぜ羅南に向かわなかったのか、私には後々まで疑問が残った。

三 日本軍への協力が仇となる

その夜は雨の中で過ごしていたが、そこに日本軍が通り羅南への案内を頼まれ、私たちも日本軍と同行できるならばと、喜んで案内を始めた。私も将校さんの軍用靴を背負って先頭に立って歩いたが、輪城付近まで来ると部隊はソ連軍と戦闘するとのこと、ここで別れることとなった。将校さんが何か書いた紙を母に渡し、母もそれを大事そうに懐に入れていた。その後八月十九日の朝、ソ連兵による臨検で発見され、ソ連軍に対する敵対行動の証拠とされ、母をはじめ六人が射殺された。この紙片には「協力に対する感謝の言葉」が書かれてあったとのことである。

さて、部隊と別れた私たち八人は、羅南方面に向かったが、途中で擦れ違った朝鮮人から「清津飛行場や、海岸も危険だ！」と教えられ、羅南に

認に行くので玄関先に赤い布を揚げておくように」と付け加えた。家に戻って間もなくソ連兵と通訳が来て「あなた方は、ソ連軍が安全を保障するので勝手な行動をしないように」と言った。通訳は「このソ連軍は規律の正しい部隊ですから、安心してここで生活して下さい。横山さんも取り調べが終わったら釈放されるから待っているように」と説明してくれた。

運命の八月十九日の朝がやってきた。私は早朝から父が置いていた船舶用双眼鏡で街の方を見ていると、鉄道官舎と、清津税関長官舎の間からソ連兵と朝鮮人集団が、こちらに向かって来るのが見えた。よく見ると昨日のソ連軍とは全く違う、異様な感じのする集団で、瞬間的に「母さん！露助が来る。昨日のと違う！」と叫んでみんなに早く逃げるように言ったが、それと同時に玄関が破られる音がした。

私は裏の窓ガラスを破って脱出した。家の中から「兄ちゃん！ 待って」と言う悲鳴がしたが、

向かうことをあきらめて、同行の横山さんの意見で静山町の横山さんの家に戻ったが、その夜は激しく銃弾が飛び交い、防空壕に避難した。母たちは「もしかしたら、あの日本軍の人たちがソ連軍と戦っているのではないか？」と話し合っていた。

八月十八日になると、銃声も遠くなり静かになったので、横山さんが「ここについては危険だから、他に避難しよう」と言い出しみんなも同意して、再び三家族八人は清津市街に出た。清羅街道はソ連軍の兵隊や、岩のごとく大きな戦車、車両などであふれていた。駅付近まで来るとソ連兵によって止められたが、そのとき私の頭の中で、「ソ連兵によってここで撃たれるのではないか」という思いがよぎっていた。そのうちにソ連軍将校と朝鮮人が来て取り調べられたが、その朝鮮人は「私は通訳で早稲田大学を出ている」と言っていた。男性に対しては厳しく、女、子供には簡単な取り調べであった。横山さんだけ残されて、七人は横山さん宅に戻るように命令された。そして「後で確

一刻も猶予はないので、そのまま高台下の空社宅に飛び込み、床下に隠れた。間もなくして泣き声が聞こえ、母と妹の展子、そしてほかの二家族四人の六人がソ連兵に囲まれて階段を下りて来るのを見た。今でもそのときは臉に焼きついていて、うなされることがある。しばらくすると激しい銃声がしたかと思ったら、虫の泣き声も止まり静寂が訪れてきた。あまり静かになったので私はいよいよ出して家に戻ると、家の中は足の踏み場もなく荒らされていた。母から私が責任を持って守りなさいと言われていた重要書類の入ったカバンがあったので、すぐに拾って肩から掛けて外に出て、周りの様子をうかがいながら母達が連れられて行った小さな川のそばの広場に行ってみた。

そこには、人間が一行に並んで横たわっている姿が見えるので、周囲を窺いながら近づいて見ると、母が展子の手をしっかりと握って倒れていた。周りに横山さんの奥さんが小兒麻痺の娘を背負ったままの姿や、井上さんとその娘など六人全員が

倒れている姿が目に入った。

私は、愕然と茫然と恐怖が、一緒になって襲ってきたような気分になった。側には流れる血が小さな池のように溜まっていた。ソ連兵に見付かると殺されると思い、母と妹の体を触り、死んでいることを確かめて急いで小川を渡り、鉄道官舎を走り抜け、料亭「音羽花壇」の前を通っていたら、後から朝鮮人国民学校の四年生の男の子がついて来るので、危険を感じ命懸けで走った。やっとのことで浦項洞ロータリーに出て再び振り返ると、その子はいなかったが、気が付くとそこは私が毎日通学していた通学路であった。そこにもソ連軍の重戦車や装甲車、トラックなどがあふれていて、さらに恐怖心を増した。

私はさらにひたすら輪城町方向に走った。かつて学校の行軍で輪城駅付近の山に登ったときの先生の言葉を思い出して、送電線鉄塔を目標にしていた。喉が渴きひりひりしていたが、母たちの遺体を見た愕然と恐怖が混在している精神状態で歩

必死になって走り、人の気配のない山道に入ると急に尿意をおぼえ、今朝以来初めてゆつくりと排尿した。このことは今でも鮮明に思い出す。

日が暮れ始めたので、鉄塔付近で野宿をする覚悟で歩いていると、頭の上に荷物に乗せた一人の朝鮮人の老婆に出会った。先方も子供が一人で歩いているのをいぶかって立ち止まったので、私はおぼつかない朝鮮語で「イリボンサラミ、イツソ」と声をかけると、一瞬周りを見渡して人影がないのを確かめると、日本語で「おまえ一人か!」と聞くので「はい一人です。母と、妹は今朝、露助に殺されました」と返事をしたら、その老婆は後ろの山を指して「早く行け! この山の向こうに日本軍が大勢いるから。早く行け!」と言って、老人とは思えない足取りで姿を消した。

私は、この山中に日本軍がいるという言葉には半信半疑であったが、老婆の言葉がためであらうとも思えないので、指差した方向に向かって草と木を押し分けて登って行った。

いていた。しばらくすると清津飛行場が見えてきたので、横を流れる輪城川で始めて川の水を飲んだ。今朝見た母たちのためにも、なんとしてでも日本に帰ることが私に与えられた使命と思い、決死の覚悟をした。輪城駅が近くなりこのまま町中を通るのは危険とは思ったが、他の道を知らないので町中を突破することにした。

四 輪城町通過が成功する

町中は無人のように不気味に静まり返っていた。駅前の道路に出ると朝鮮人七人、八人が私の方を見て指を指し、何か朝鮮語で話をしていった。恐怖心が頭をよぎり、今朝見た射殺現場の光景が目につかんて走ろうとしても走ることができず、いつ呼び止められるかと心臓が止まるような思いをしながらも、その前をゆつくりと通り過ぎた。結果は何とか無事に町外れまできたが、その辺りには人の姿は見当たらなかった。後で知った話だが、後日、この駅前を通った日本人が彼らによつて虐殺されたとのことだった。

五 奇跡! 日本軍に救出される

山に登っていると、突然「だれか! だれか!」と大声で誰何され、同時に「ザザザ」という音がして、稜線付近から銃を構えた数人がおりてきて私を囲んだ。体中に草や枝をつけていたので、びつくりしてしまい替えていると、その中の一人が「この子は日本人ではないか」と言って私に向かつて「坊や! 一人でここまでどうしてきたの?」と問いかけた。私は突然の事態で恐怖心が先になって泣き出してしまった。「坊や、泣くな、ここにいるのは日本軍だ!」と話しかけてきたので、私も一瞬茫然となり、次いで安心感から虚脱状態となった。泣いていた私もやっと落ち着きを取り戻して、ここまでの行動について詳しく話す時、「坊や、もう大丈夫だよ! ここは日本軍部隊だ。今から本部に連れて行く」と言われて稜線に上った。よく見ると大勢の日本軍が見えた。このときの私の心は安堵感と力強さでいっぱい、今でもその気持ちを言葉ではよく言い表すことがで

きない。

このことも、今朝ソ連兵によって射殺された母の魂が、我が息子の命を救ってくれたのだと思ひ、終生心に刻んでいる。

兵隊さんたちは、「日本人の少年ではないか？よくも一人でこんな所まで来たものだ」と、口々に言っていた。兵隊さんは私を将校の所に連れて行き、事情を報告した。将校は「それは気の毒な事だ。すぐに部隊長に報告するので、ここで待機しておれ」と言った。兵隊さんの一人が、飯盒で炊いたご飯と牛肉の缶詰と水を私の前に置いて、「朝から何も食べていないのだろう。ゆっくり食べなさい」と言ってくれたので、涙があふれて、なかなか喉を通らず、少しだけしか食べられなかった。その後で、一軒の朝鮮人農家にある本部に連れて来られた。軍刀を手に髭を生やした立派な姿の将校がおられた。この方がこの部隊の隊長山根次郎大佐であることを後に知った。山根大佐は、「上原の坊や、安心するように」と言って、側にいる

を排して脱出せよ」との命令が渡辺准尉と尾又曹長の二人に示されたが、今でもその言葉が昨日のごとく明確に私の耳に残っている。

また、私は「あと二時間発見が遅れていたら、日本軍により救出されることは無かった。まさに危機一髪だった」と聞かされた。

六 古茂山での捕虜生活

その日、日暮れ近くに羅南練兵場に向かって行軍を開始し、明石先生と私も部隊の中に入って歩いた。

翌日の八月二十日からは、咸鏡北道の古茂山で捕虜生活をする事となり、羅南練兵場から再度古茂山に向かった。明石先生と私は、ソ連軍の監視兵に誰何されないように兵隊さんによって囲まれながら行軍し、夜には無人の朝鮮農家で、明石先生は床下で寝て、その上の床に部隊長が^{むしろ}藎を敷いて休んでいた。

古茂山に到着すると、ソ連軍の指示で将校グループは小野田セメントの社宅跡に収容されたが、

兵隊姿の人を指して「この人は清津の松坪国民学校の女の先生で、明石常子さんだよ」と言って紹介された。頭を丸坊主にして軍服姿だったので、女の人は全然気が付かなかった。明石先生は、清羅街道を一人で羅南に向かって脱出していたときに歩哨線で救出され、軍服姿になって保護されているとのことだった。山根大佐の側にいた将校の一人から、「今から部隊長の命により上原少年と明石常子は、我が部隊で保護する」と、力強い言葉で告げられた。後日、明石先生が私に「山根部隊長のご恩は生きている限り一生忘れてはいけませんよ」と、何回も言われた。

そして、奇跡的に山根部隊に救出された私は、部隊の一員として保護された。そして山根大佐は「今からソ連軍との停戦交渉と武装解除のために、ここ鳳岩洞より出て羅南練兵場に向かうが、万が一にもソ連軍との交渉が決裂した場合は、石を投げてでもソ連軍と戦うが、その場合には明石常子と上原少年の二人を同行保護して京城方面に万難

明石先生と私も部隊長と共に将校グループでの捕虜生活が始まった。

九月に入ってから間もなく、部隊長は明石先生と私を何とかして無事に日本に帰す方法はないものかと考えておられたようだった。

山根部隊長の所属する羅南師管区部隊の家族は、羅南駅から列車で避難したが、京城方面に直接向かわずに、奥地の白岩方面を目指したまま消息不明になってしまった。後日に分かったことだが、この判断は大きな間違いで、列車はソ連軍に押さえられ、苦勞して咸興地区の富坪の避難収容所にたどり着き、そこで悲惨な難民生活となり、山根部隊長の長男、長女をはじめ多くの家族がこの地で犠牲になったとのことであった。

九月上旬のころ、部隊長は明石先生と私を呼んで「自分たちは、近いうちにどうも満州かシベリアに送られそうだ。これから我々と一緒では生死の保証がない。君たち二人は民間人だから、我々捕虜よりは日本に早く帰ることができるのではな

いか？」と話され、さらに「決心がついたら、私がソ連軍当局に二人の事情を話して、清津に安全に帰れるように依頼する」と言われた。

明石先生は「どこまでも部隊と一緒に行動する」と答えると、部隊長は私たちの手を取って「よく聞くのだよ！ 今話したように我々と一緒では生死は非常に危険だ。一刻も早く元の居住地に戻れば、まだ二人のだれかを知っている人もいるはずだよ」と噛み砕くように話された。「清津に戻ったら、二人で助け合ってなんとしても生きて日本に帰るのだよ！」とも論された。

私たちは、泣きながら戻る決心を部隊長に伝えた。ソ連軍当局からは「安全に列車で古茂山駅から清津駅まで送る。出発は明朝」という回答があり、あまりにも早い部隊との別れに再び涙したものであった。渡辺准尉や、部隊長の当番兵だった加藤兵長などが、明石さんのモンペや上着、私のズボンや上着の芯に部隊が所持していた朝鮮銀行券を小さく折りたたんで縫い込んだ。このお金はそ

見も知らぬ朝鮮人家族が住んでいたのです、ここは私の家だったことを話したが、家財道具を入れていた防空壕はソ連軍によって爆破、焼却されたことを知らされた。隣の家に行くと、以前から働いていた朝鮮人の女中が出てきて私の顔を見て驚き、「早くどこかに行け！ 露助に殺されるぞ！」と言ったので、私は「ソ連軍当局によって古茂山駅から清津に昨日戻ってきた」と話した。するとその朝鮮人は少し安心した様子になり、鍋と毛布をくれたが、まだ恐ろしがって早く立ち去れと言うので、急いで明石先生が待っている班竹町の社宅跡に戻った。

九月も末になると、清津も朝夕寒さが厳しくなってきた、食べることも心配になってきた。そんなとき、同じ避難民の人から清津港倉庫の作業に行くことと飯がもらえろということ聞き、明石先生もソ連軍の作業ならば安全だろうと言ったので、翌日から作業に行くこととなった。ソ連軍のトラックに大勢の避難民と一緒に乗って、清津港倉庫

れからの生きていくために大変役立った。

翌朝、八月十九日夕に鳳岩洞で部隊によって救出されて以来、約二十日間お世話になった山根部隊の人々との捕虜生活に別れを告げて収容所を出ると、部隊長をはじめ一同の方々が、「よいか！ 二人で頑張って生きて日本に帰るのだぞ！」と、別れの言葉を口々に叫んでいた。

古茂山駅で清津に向かって動き出した列車は、すぐに左側の収容所が近づくと、再び全員が私たちに向かって「二人で頑張れ！」と列車が見えなくなるまで手を振っていた。

七 奇跡のなかの奇跡が展開

列車が清津駅に着くと、同乗していた日本人避難民は一齐に日本人住宅跡に向かって走って行った。私たちは比較的窓ガラスや建具の残っている家を探して、そのひと部屋を確保したが、鍋、釜一つないので、私は元の自宅に一人で行ってみることにした。

翌日、約四十日ぶりに家に行くと見ると、全く

に行き働いた。中国人は白米、朝鮮人は白米七、麦三、日本人は白米五、麦五の割合のおむすび二個がもらえた。

作業が終わったとき、一緒に仕事をしていた中国人の男性が「お前たち、姉弟二人でおむすび二個では腹がすくだろう」と言って、自分ももらった白米のおむすび一個をくれ、「これを夕飯にお粥にして食べる」と言った。この中国人男性は、翌日にも私たちに自分の白米のおむすび一個をくれて「よいか！ お前たちは頑張って、どんなことがあっても生きて日本に帰るのだぞ」と励ましてくれた。

この中国人男性の言葉は、終戦後六十年を経過した今日でも、忘れることのできない心温まる感動の励ましの言葉であった。

その翌日も二人で倉庫での作業を続けていると、通り掛かった一人の避難民が「あら！ 常ちゃんではないの？」と驚きの声をあげて走り寄ってきた。明石先生はその人の顔を見るなり「〇〇さん

のおばちゃん」と言つて駆け寄り「おばちゃん！私の父や母を知りませんか？」と尋ねると、その人は「ご両親は艦砲射撃が始まるとすぐに常ちゃんを松坪国民学校に尋ねたが、すぐに羅南方面に避難したよ」と話し、さらに「一体常ちゃんはどうしてここに？」と聞いていた。先生は今までの経緯を話すと、そのおばさんは私の方を見ながら「とにかく二人だけでは危険だから、このまま私の家に来なさい」と勧めてくれた。その人は先生の両親と同郷の人だったが、艦砲射撃が始まったときには、あまりにも突然だったので逃げることもできずに、そのまま自宅に留まっていたとのことだった。

二人はそのままそのおばちゃんに連れられてその家に行き、その日からその家族との共同生活が始まった。二、三日後、その人は私に「近くのお寺に日本人孤児がいるが、その中に殺された妹さんと同じ名前の孤児がいるよ」と話してくれたが、私もその家族の人も同姓の孤児だろうと聞き流

していた。

その翌日は、晴天で何もすることがなかったの
で、私は日本人孤児が収容されているというお寺
に行つてみたくなり、門をくぐつた。窓の所に、
両手で顎を支えて頭に風呂敷か布切れのような物
をかぶっている女の子を見たので近づくと、その
子も私に気付いて私の方を見ていた。さらに近づ
くと、ソ連兵に銃殺されたはずの妹の展子によく
似ているなと思つたが、母と共に銃殺されて、そ
の遺体も確認しているので、展子ではないかとい
うことは思いもせずに、ただよく似ているのでさ
らに近づいた。しかしあまりにも似ているので「あ
んたは展子ちゃんではないか？」と声を掛けると、
それまでただ黙つて私を見詰めていたその子が、
突然に「兄ちゃん！」と叫んだので、私はびつ
くりしてしまった。私は走つてお寺の中に入り、「妹
の展子が生きていた！」と大声で叫んだので、周
りの人たちが集まつてきて私の話を聞いてくれた。
「これは奇跡だ！ 奇跡だ！」と大騒ぎになった。

しばらく私と展子が落ち着くのを待つてから日
本人孤児収容所の人から話を聞くと、妹は銃殺さ
れた母たち六人の遺体を付近の朝鮮人の人たちが、
鉄道官舎の防空壕に埋葬していると展子が息を吹
き返しているのので、朝鮮人の人たちも驚き処置に

孤児の一団は、子供連れの家族などに付き添われ
て咸興まで南下することとなり、私は明石先生と
別れて展子と一緒に孤児団と同行することになり、
明石先生とはこれが永久の別れとなった。
明石先生は、昭和二十一年に引揚げられたが、
昭和二十五年に広島県で結核で亡くなられたこと
を数年後に知つた。合掌するのみ。

八 悲惨極めた避難孤児たち

に見付かつて、また殺されるぞ！」と言われて、
その場から追い払われたらしかった。清津市街に
向かったが、そのうちに前を歩いていた朝鮮人男
性の後について歩いてたが、不審に思ったその
男性から事情を聞かれ、裸足にされて離れてつい
て来なさいと言われ、日本人がいるところまで連
れて来られ、「この子は日本人だ。母親は今朝ソ連
兵に殺されたのでお前たちで面倒を見てやれ」と
言つて帰つて行ったとのことだった。展子の銃撃
の傷は、右手首の貫通銃創で出血もわずかであつ
たので、奇跡的に助かったのだった。その日は、
忘れもしない昭和二十年九月末であつた。

それから数日して孤児収容所に収容されていた

思いもかけずに展子と一緒にになり、孤児団の一
員として貨物列車に満載されて、一般の避難民の
人たちと一緒に咸興に向かった。列車は遅々とし
て進まずに、途中の駅で長時間停車したりした。
避難行中の食事も一般の避難民家族とは別で、大
豆、高粱、麦が少し入った小さな団子のようなも
のを渡され、朝夕に水と一緒に喉を通していたが、
清津駅を出るころには全員栄養失調で、青白くも
やしのようになせ細つていた。日本人避難民会か
らも放置状態にされていた。

私は、古茂山収容所を出るときに山根部隊の兵

隊さんによって雑のうや服の襟などに縫い込んでもらった朝鮮銀行券があったので、それが二人の命の糧となった。駅に停車すると展子を連れて、付近で食べ物を売っている朝鮮人から白米の握り飯や朝鮮餅を買って飢えをしのいでいた。このお金がなかったらどうなっていたかと思うと、感謝の心が今でもこみ上げてくる。

九 父と姉に、感涙の再会

南下している途中で、ソ連軍によって機関車が徴発されたので孤児団は徒歩で咸興に向かい、数日間野宿しながら市内に入った。すると遠くの方で大声で「一司さん！ 展子ちゃん！」と叫ぶ人がいるのでよく見ると、父と千津代姉さんだったのでびっくりした。

父と姉の話では、八月十三日に羅南の銀行に行ったが、もう銀行も郵便局も閉鎖していたので、すぐに清津に戻った。しかし、途中でソ連軍の上陸に遭遇して輪城駅付近の山中を迂回して夜中に帰宅したが、すでに家にはだれもいないので、家

の黒板に「羅南から戻ったがだれもいないので、八月十四日は輪城駅で待っている」と書き置きして家を出て夕方近くまで駅で待っていたとのことであった。

再会した私と展子は、父と姉に連れられて父たちの避難先の和田文房具店に落ち着き、親子四人の避難生活が始まった。お金がないので、わずかに持っていた衣類を売って高粱や麦を求め、雑炊にして飢えをしのいでいた。

寒さが厳しくなった十二月末、私は父が苦勞して手に入れた石炭火鉢に覆いかぶさるようにして暖をとっていたところ、一酸化炭素中毒になり火鉢に乗せていた薬缶をひっくり返して、左足に大火傷をしてしまった。父は私を背負って病院に行ったが、薬も塗布薬もなく木炭粉を火傷の上にふりかけ、太陽光線に当てるだけの治療だったが、厳冬の寒気で化膿が奇跡的に止まった。

十 単独で三十八度線を越える

昭和二十一年三月、ソ連軍の正規部隊が本国か

ら咸興地区に進駐すると、すぐに治安が回復して安心した生活ができるようになり、同時にソ連軍政部により日本人避難民には乳児も含めて一人一日、米四合の配給が開始された。これにより日本人避難民の死亡は嵐が去るごとく少なくなっていた。

四月になると三十八度線を突破して南朝鮮に向かう計画が、日本人避難民委員会を立てられて総引揚輸送本部が設立された。その計画の第一段階として、重病人一人に担架要員として単身男子二人を一組とする病院班が編成されて、私も重病人に指定されて五月末に女、子供だけの避難民と一緒に咸興駅を出発し、数日後に元山駅に着いた。しかし、ここで貨物列車に乗り換えようとしたとき、「ソ連軍の荷物検査がある」という叫び声で駅構内で混乱していると、今度は「貨車に早く乗れ！ 出発するぞ」との叫び声が出て、混乱は一層ひどくなった。私は火傷の経過もよくなっていたので、とっさに荷物を抱えて避難民の乗車している貨車

に乗った。あとで知ったことだが、このとき北朝鮮臨時政府の黙認で元山駅に二列車が準備されていて、私の乗った列車は日本海側の三十八度線の境界近くの襄陽駅に、別の列車は同じ三十八度線の境界近くの鉄原駅に向かった。

私の乗った列車は無事に襄陽駅に着き、そこから徒歩で三十八度線を越えて、アメリカ軍に救出されDDTを全身にかけられてから、注文津に連れていかれた。重病人は病院に収容され、一般避難民は海岸近くの天幕の収容所に入れられ、ここで日本からの引揚船を待つ生活が始まった。

十一 LSTに収容、長崎に

注文津の病院で待機している間、左足火傷も日に日に回復し歩行にも支障がなくなり、重症患者の食事の世話などをしていった。六月のある日、炊飯の準備をしているとき何気なく正門の方を見ると、一目で日本海軍の軍人と分かるような服装の人が独りで入ってきて、私に声を掛けた。「坊や！ ご両親はおられるか？ 私は今、日本から

きた米軍補給船の乗員です。日本人避難民の方に、日本内地の様子を話そうと思いつねてきました」と言われた。私は今日までのことを話すと、その人は深刻な表情をして涙を流していた。「あとで詳しく話を聞きたい」と言って、病院長のところに行った。そこで病院長に「この上原一司君の母親のことを詳しく聞きたいので、自分の乗っている船に連れて行く」と断って、私を連れ注文津港岸壁に向かった。

迎えの舟艇を呼ぶのに、叫んだり手旗信号をしたりしたが、応答がないので、その人は服を脱いで私に手渡し、岸壁から飛び込み泳いでLSTに行った。私も岸壁から見ていると、しばらくして舷側に垂れている縄梯子をするすると登って行く姿が見えたので、ほっとした。

迎えの舟艇でLSTQO十二号の舷側に着き、生まれて初めて縄梯子を助けられながら登って甲板に上ると、乗組員が大勢出迎えていた。

乗船した私は、すぐにシャワー室で裸にされ風

後を遂げた亡き母の魂のおかげと、そのときも思った。

食事の後に医療担当の人に火傷の傷口を見てもらい、まだ化膿していたので、ペニシリンの注射を受けたが、船員の担当の人から「これは米軍のペニシリン注射で、日本のやみ市では千円もしているが、普通では絶対に手に入らないよ！」と教えてもらった。長崎港に着くまで続けて打つてもらった。

予定ではその夜は船内に宿泊し、翌日に再び注文津の病院に戻るようになっていた。眠れない夜が明けて、船内食堂で夢を見ているような気分が朝食をとっていると、「おおい！ 上原の坊や、喜べよ、このまま船に乗って日本に連れて帰るぞ！」と新井さんが言いながら食堂に入って来た。食事の人も手をたたいて「よかったのう！」と喜んでくれた。

話によると、木村船長と新井事務長が相談しこのまま長崎まで連れて行くこととなり、米軍司令

がいるとのことで散髪され、乗組員がミシンで体に合わせた旧海軍の防暑服とズボンを着せられ、船長室に行きあいさつをした。

船内は清潔で、乗組員全員は旧海軍の人たちで、厳正な規律がそのまま保たれている様子だった。船長の木村さんは、旧海軍少佐で私と同県人で駆逐艦乗りとのこと。私を連れて来た人は高等商船出身の新井少尉で、この船の事務長をしていた。

私はこの数時間の変化で頭がぼーっとなつていると、新井さんのお腹がすいているだろうからと言って船内食堂に行くと、真っ白い布で覆われたテーブルに座らされた。たくさん食べなさいと言われて、ステーキやスープや山盛の白米のご飯などが出され、新井さんと二人で食べながらも、あまりの変化で味などは全然分からなかった。このときに突然、八月十九日山根部隊の人に救出されて、柳こうりの弁当に山盛ご飯と牛肉の缶詰を食べたことを思い出した。私は、よくよく日本陸軍と日本海軍に助けられるという奇跡は、非業の最

部の許可を得たとのことであった。朝食後、直ちに新井事務長さんと私は舟艇で注文津の病院に戻り、新井事務長さんから病院長に事の次第を話して許可を受けた。病院の全員は、私の清潔な服装を見て羨望の声を上げていた。自分の荷物だけを持って、みんなに別れを告げてLSTに戻った。

翌日は注文津の小学生の見学があったが、防暑假姿の私を見て驚いていた。注文津に三日間ぐらい停泊して出航し、北緯三十八度線側を南下し江陵、春川などに進駐している米軍に軍需物資を補給すると、直ちに長崎に一路針路を向けて航行した。

十二 長崎に初めて上陸

LSTは波静かな海路を順調に航行し、昭和二十一年七月上旬の早朝、晴天で海面が光輝く長崎港外に近づくと、乗組員から「上原の坊や、かすかに見える山は長崎だよ。だが長崎は原爆で全滅したが、少しずつ復興しているよ！」と教えられた。長崎港内に入り、多くの離れ島と連絡する船

と出会うと、「あの船に乗っている学生は、長崎市内の学校に通学している生徒たちだよ」と言っていた。

三菱長崎造船所のドック近くに接岸したLSTからドックを見ると、たくさんの人間魚雷の残骸が積み上げられていて、廃墟となっていた。乗組員と一緒に市内の岸壁に上陸し、花柳街の料亭丸山に連れて行かれた。乗組員の宴会が始まり、私は別室で今まで見た事も食べた事もないご馳走の膳に、呆然となった。現在でも何を食べたか分からないが、中華料理のような気がする。

帰港会が終わると、新井事務長と一緒に焼け野原となっている長崎市街を通り長崎駅に行き、門司港行きの夜行列車の一等車に乗り下関に向かった。翌朝門司港から連絡船で下関の棧橋に到着すると、新井事務長と父が渡鮮するまで在職していた昭和商會を訪ね、島津社長に私の単独帰国の事情を説明した。島津さんは「大変な苦勞をされましたね」と言われた。そして、すぐに亡母の実家

すぐに入院し各種の精密検査の後「下喉頭部の腫れは悪性腫瘍です」と告げられ、治療が始まった。以来、闘病生活約一年数回に及ぶ大手術を経て、平成十四年十二月二十六日に無事に退院することができた。

追 想

昭和二十年八月に北朝鮮咸鏡北道清津府で迎えた終戦から、私は数奇な運命を背負いながらも奇跡的な出会い、「山根部隊将兵による救出と、LST QO十二号の旧日本海軍乗組員の配慮による単独帰国の実現」について心新たに感謝を申し上げますと共に、北朝鮮からの引揚げの途中において悲運な最後を遂げられた幾多の日本人同胞に、胸の底から万感の思いで合掌を捧げます。

に電報で私のことを知らせた。

数日後、迎えに来た叔父に連れられ亡母の郷里で生活を始め、地元の島根県白岩小学校に通学した。

咸興に残留していた父、姉、妹も、私の単独帰国と同じ時期の昭和二十一年十月に無事に引揚げてきた。

十三 帰国後の生活

私は学校を卒業後、父たちが生活している下関に戻り、下関市役所に勤務、平成六（一九九四）年三月に定年退職し、すぐに社会福祉法人知的障害者施設に再就職した。全く環境の違う職場で日々戸惑うこともあったが、知的障害者と生活を共にし、平成十年七月、満六十五歳で第二の定年を迎えた。

十四 病魔を乗り越えて

平成十四年の一月、右耳に少し痛みを感じたので受診すると、医師は「下喉頭部に異常な腫れがあり、直ちに精密検査の必要がある」と診断した。

大陸の夢破れて

岡山県 村岡英之

はじめに

今年もまた終戦の八月十五日がやってきた。日本ではこの日が時代の区切りであるが、私たちソ連との国境に住んでいた者にとっては、八月九日が運命の日である。ソ連の参戦、居住地からの脱出という意味で忘れ得ない日となっている。約六十年前のことであるが、敗戦のころからその後のことを思い出して書いてみたいと思う。

一 海外移住の動機

岡山県を北から南に流れる三大河川の一つ、吉井川の中流域が私の先祖の住んでいた所である。いつの時代からかは明確でないが、先祖の墓は数多く林立しており、相当古いものである。村の畑は少なく、農業だけでは生計が困難で、江戸時代は水運業もやっていた。